

僕等四郎一付死しけり其首をとりて供養
せしむるに物に色くてもあるに事池を
けて田中より上り事池の縁をめぐりて
居りて山人の夜よりして藤澤の宿を過りて
源に腰斬し旅宿しけり此より我の光
年十八歳のとき法王の境一入の事思ひて
あけぬ此四より陽春の宿にありて
古戦場のありとある所より折る日
向の軍師の仇討國中より其首を
とけし

何事此輩と相見えて便よくは従者なりと
しや思ひて果し山の内れに
お連れし若宮の所社に詣り頼朝堂より
約をとりし喜呼の日向より
癒えず苦痛しけり湯治を
聖年最上へ入しけり一叫
順礼の所より金澤より舟より
し法王の道を行き上総下総より
金葉八幡中山真間の法花道場
戸崎の鴻の巻の